

科学とポピュリズム

2012年9月8日

「科学の価値選択」研究会

加藤尚武

1、スーパー民主主義の可能性

- 代議制はなく、すべての議案が毎日の電子国民投票で決定される。
- 議決内容の知識のテストが添付されていて、そのテストに合格しない票は無効となる。有効投票数は国民の90%とする。
- 個人の自由な選択の集計が合理性に収斂することは可能か。

2、ポピュリズム批判の古典

- プラトン：ポリテイア
- 民主主義的性格：若者は、必要な快樂に劣らず unnecessary 快樂のために、金と労力と時間とを費やしながらか生きて行く。あるときは酒に酔いしれて笛の音に聞きほれるかと思えば、つぎには水しか飲まずに身体を瘦せさせ、あるときはまた体育にいそしみ、あるときはすべてを放擲してひたすら怠け、あるときはまた哲学に没頭して時を忘れるような様子を見せる。彼の生活には、秩序もなければ必然性もない。しかし彼はこのような生活を、快く、自由で、幸福な生活と呼んで、一生涯この生き方を守りつづける。
- 岩波プラトン全集11巻606-7頁

3、教養人・古典主義の支配

- 規範的な判断の準拠枠は古典
- 西洋：プラトン、キケロ、
- 中国東洋：論語等、
- イスラム圏：クオラーン等
- 実定法主義、罪刑法定主義ではなくて、古典から規範的判断
- 国際語したがって国民言語を超越、文字の階級制

4、教養人から専門人への転換

- 今日、社会的権力を行使しているのは誰であろうか、また時代に自分の精神構造を押しつけているのは誰であろうか。それは疑いもなくブルジョアジーである。それでは、そのブルジョアジーの中で、最も優れたグループ、つまり今日の貴族とみなされているのは誰であろうか。それは疑いもなく専門家、つまり、技師、医者、財政家、教師等々である。それではこの専門家のグループの中で、最も高度にそして最も純粹に専門家であるのは誰であろうか。それは疑いもなく、科学者である。オルテガ・イ・ガセット「大衆の反逆」神吉敬三訳ちくま学芸文庫155頁

5、専門家としての科学者

- 一八九〇年になると、歴史上前代未開の科学者のタイプが現われた。それは、分別ある人間になるために知っておかなければならないすべてのことのうち、一つの特定科学だけしか知らず、しかもその科学のうちでも、自分が積極的に研究しているごく小さな部分しか知らないという人間である。そして、彼は自分が専門に研究している狭い領域に属さないいっさいのことを知らないことを美德と公言し、総合的知識に対する興味をディレッタントイズムと呼ぶまでになった。オルテガ・イ・ガセット「大衆の反逆」神吉敬三訳ちくま学芸文庫157頁 1930年

6、新技術への対応

- 出生前診断にもとづく選択的人工妊娠中絶
- 自由:人工妊娠中絶は母の自己決定権に属する。幸福追求権の行使。「ダウン症の子を産みたい」人にも権利。人間の自由の拡大は善である。
- 伝統:子は授かり物であるから、選択の対象とすべきではない。「公序良俗」「人間の尊厳」に反する。
- 合意:社会的な合意が成立するならよい。
- 合理:長期の世代間的視野までいれて合理的なら善。
- 自然:自然の摂理に従うべきである。21トリソミーは自然の過失であるから、人為によって訂正すべきだ。

7、危害以外の規制根拠

- 人間の尊厳、基本的な人権、公序良俗、社会的な公平・均衡、神の意志、神を演じるな、自然の根源的な目的、伝統的な価値観、直感的に「おぞましい」等々の理由
- クローン人間、代理出産、臓器売買、同性愛、人種差別、近親相姦、性転換、エンハンスメント、男女の産み分け、等々

8、クローン問題

- A: 個体尊重主義: クローン人間は、同一の人間(コピー人間)を複数生み出すので、個性尊重の憲法の原則に違反する。
- B: 古典的危険説: クローンの方法ではコピー人間を作ることにはできない。ゆえに、クローン人間の禁止理由は、それによって生まれる人間がいかなる危害を負うかが不明であるから。

9、科学について知る権利

- 政策決定の手段としての科学。政策決定者。
- 幸福追求の選択肢として。利用者
- 危険負担が発生するか否か。同意原則。危険負担者
- 開発・維持・最終処分分の公共負担。納税者

10、自然科学について知る必要

- 私たちの生存の場である自然の究極のあり方を知る
- 人文科学、社会科学とくらべて最も確実度の高い真理
- 自然の歴史性、生命操作の可能性
- 社会的な合意形成の基盤

11、マートン科学論

- 公有性COMMUNALITY
- 普遍主義UNIVERSALISM
- 私的利益からの解放DISINTERESTEDNESS
- 系統的懐疑主義WELL-ORGANIZED
Skepticism

12、ラベッツ科学論の政治的質問

- 優先順位と財源
- 有害な技術
- 人体(人間の心身)の改造
- 進歩の評価
- 誰が科学の説明責任を果たすか
- ・ラベッツ科学論こぶし書房184頁

13、優先順位の決定可能性

- 科学研究費の決定にさいして、個別の研究領域の重要度、有望度、投下研究費と成果の比率が分かっている。材料工学、エネルギー工学、生物工学などの「研究開発」のなかでの割り振りは、おおむね過去の実績から決定されている。より上位の配分基準では、たとえば社会福祉、災害復興、研究開発の配分は、政治情勢で決定される。配分決定が「正しい」ことの検証ができない。

14、経済学

- ある若い編集者（経済学部出身で私の後輩）と学部でどのような経済学を勉強してきたかという話題になったのだが、その様変わりに驚かされた。
- 彼は、基本的に、市場競争中心のミクロ、マクロ、そしてその応用や各論しか勉強していない、というのである。たとえば、ケインズ理論、マルクス理論、経済学説史といったものは、少なくとも体系的にはほとんど勉強していない、という。
- 佐伯啓思「本」講談社2012年9月号

15、学問の細分化は何故起こるか

- 若手は業績評価を急いで、重箱の隅に走る。指導する重鎮は、隅の議論についていけない。世代が交代して、その若手が重鎮になりならに、細分化が進む。
- 古い研究者は特定領域の研究者であると同時により上位の「メタ・サイエンス」の研究者でもあった。各領域が、メタの次元を消滅させて、相互の関係を見失いつつある。

16、政策全体が統合失調になる

- 財政の健全化→消費税率UP→選挙の敗北
ポピュリズム→国債発行高の増大
- 国債は市場による調整を受けるので安定という説は信じられない
- ヴァーチャル経済の巨大化＝市場の「カオス」化

17、政策の合理性を高める

- 資源問題、環境問題について長期的な展望をもつ
- 経済政策の基本を「成長から持続可能性へ」転換する
- 長期的に見て最悪事態を回避するという原則